

第2回目黒区消防団運営委員会会議録
(令和5年8月16日付け都知事からの諮問に対する審議)

1 開催日時、場所

令和6年8月29日(木) 午後2時から午後3時35分まで
目黒区総合庁舎4階特別会議室

2 出席者(敬称略)

(1) 委員長

青木英二(目黒区長)

(2) 委員

西崎つばさ(都議会議員)、斉藤やすひろ(都議会議員)

岸大介(区議会議員)、上田みのり(区議会議員)、はまよう子(区議会議員)、

山本ひろこ(区議会議員)、松嶋祐一郎(区議会議員)

齊藤悦弘(目黒消防署長)、高木雅(目黒消防団長)

(3) 事務局

目黒区：副区長、危機管理部長、防災課長

目黒消防署：警防課長

3 傍聴者

なし

4 諮問事項

「変化する社会情勢に適応し特別区消防団の組織力を向上させ住民の負託に応え続ける方策はいかにあるべきか」

5 議事

(1) 答申(素案)について

(2) 今後の審議予定について

6 配布資料

(1) 目黒区消防団運営委員会委員名簿

(2) 令和5年度特別区消防団運営委員会への諮問について(写し)

(3) 諮問事項に対する課題と検討事項について

(4) 第1回目黒区消防団運営委員会における質疑について

(5) 答申(素案)

(6) 答申(素案)一覧

(7) 今後の審議予定

7 会議概要

(1) 開会

(2) 委員長あいさつ

(3) 委員の紹介

(4) 報告事項

ア 令和5年度特別区消防団運営委員会への諮問について

イ 諮問事項に対する課題と検討事項について

ウ 第1回目黒区消防団運営委員会における質疑について

前回（令和6年1月）の会議内容等について事務局より説明。各委員から質疑なし。

(5) 議事

ア 答申（素案）について

【検討の方向性1－1】入団し活動を継続したいと思える組織の活性化方策

1 団活動によりやりがいを持てる方策の検討

目黒消防団員に対するアンケート結果からも、やりがいを実感するときとは、「地域貢献で感謝されたとき」、「技術取得でスキルが向上したとき」、「人とのつながりを実感したとき」、「資格取得や活動が評価され表彰されたとき」などが上がっている。

また、活動上の負担も考慮し、次の項目を推進する。

- (1) 平時の出場機会を増やし、現地での消防隊及び団指導者からのOJT教育でモチベーション向上に繋げる（出火報での出場分団を増加）。
- (2) 団活動に必要な可搬ポンプ操作や放水技術の訓練機会を増やすとともに、学生団員がその特性を活かした技術向上を実感できるよう活動や会議を設ける。
- (3) 指導者や英語等有資格者をワッペン等で可視化する。
- (4) 団活動以外で団員の結束を固めるためレクリエーションを推奨する。
- (5) イベント警戒等について、隣接分団の相互協力、分団内の権限移譲、交通整理等の警備業との分業に配慮し、地域貢献と団員負担の平準化を両立させる。

2 資格取得講座の拡充等の検討

アンケートで回答の多い救命講習受講を継続するほか、消防団員の資質の向上を図るため、防災士・船舶・手話・語学・防火管理者・玉掛け・クレーン・高所作業者・消防設備士（乙種第六類）・危険物取扱者（乙種第四類）の資格取得などを推奨し、積極的な費用負担を行う。

3 多様な主体との協働による地域密着型の各種講習や教養講座の検討

- (1) 介護施設職員や特別支援学校教諭による要配慮者支援教養、消防設備業者による設備教養、幹部団員へのマネジメント講習などを行う。
- (2) 絶対数の少ない可搬ポンプ取扱研修や機関科研修を増やすとともに、修了者による

自己団へのフィードバック教養を行う。

- (3) 消防職員による防火管理教養、催し物における危険物・火気器具などの指導要領教養、震災時救助教養を行う。
- (4) 資格保有団員による分科会（英語等）を主催し、活動の機会を増やす。

【検討の方向性 1－2】最新の技術等を考慮した活動環境の改善方策

1 災害への出場指令や、団員間の情報伝達のあり方の検討

現状では、特別区の災害指令について、東京消防庁の緊急情報伝達システムと電話を併用し伝達している。

また、現場における情報共有は、主に MCA 無線機であるが、配置が副分団長以上で、消防隊への配置もないため、活用が十分とは言えない。団員同士の連絡についても現行のトランシーバーでは、広範囲での活動には限界がある。

先般の能登半島地震での地元消防団へのヒアリング結果では、「テレビも映らない、消防署や団本部との連絡も滞る状況の中で、LINE で道路の不能箇所を共有したことで活動が容易になった。」とのことであった。

現在、平時の事務連絡も都度、LINE と電話を主に実施している状況であるが、時勢に応じて効率性を上げるため、次により推進する。

- (1) 災害指令は、地図（水利）付きとし、現システムの拡充又は、他本部で採用しているアプリ（例えば「セーフ」）を導入する。

なお、出場報告、現場の映像、団のスケジュール、各団員の行事への参加回答、各種報告等を個人のスマートフォンから遅延なく確認できるシステムやアプリを整備する。

- (2) 無線については、現場で連携する団員同士及び消防隊との遠距離でも相互通信ができるよう無線を整備する。

2 消防団事務の効率化が可能なタブレットを活用したシステムの検討

現行、団本部及び各分団本部に各 1 台しか配置されていない状況であり、常置場所が各分団本部では、十分な活用が図れていない。

なお、タブレットは事務用では期待されるが、現場では、スマートフォンでの情報共有が望ましい。

タブレットの活用を次のように改めたい。

- (1) 副分団長以上に 1 台配置し、入団手続き等をオンライン対応できるようにする。
- (2) 更新に合わせた新たなアプリやシステムでは、分団長が作成する各種報告に使用し、また、団員がアクセス可能なスケジュールの作成に活用するほか、各分団資器材を管理できるようにする。

3 各種資器材の更新に合わせた仕様変更等の検討

- (1) 活動の拠点である分団本部に仮眠室や女性更衣室等の整備を促進する。

また、震災等インフラ停止時の対応を考慮し、仮設トイレ、太陽光パネルと蓄電設備、カセットコンロ式等を整備するほか、ライト類のLED化を図る。

- (2) 救助資器材では、能登半島地震での活動隊ヒアリングからも要望のあった取扱いが容易な軽量電動チェーンソー等を数多く配置する。
- (3) 壊れやすく、緩みやすい手引きポンプの台車支柱を改修する。
なお、可搬ポンプや台車を軽量化して活動を容易にする。
- (4) 火災現場付近での活動を消防隊と同様に容易にするため、65ミリホースから分岐して先で使用できる50ミリホース及び低反動ノズルを収納バックとセットで配置する。
- (5) がれき上を自走又は増載ホースを延長可能な台車等を配置する。
- (6) 熱中症対策資器材（冷却ベスト等）を配置する。
- (7) 機動力のある積載車を早期に全分団に配置する。
なお、ホース積載スペースが限られる現行の積載車を改良する。

【検討の方向性2-1】消防力維持のため計画的な人材育成方策

1 経験が浅い消防団員への教育訓練体制や目標、内容の検討

現状、コロナ禍以降、この1年、活動訓練を復活させ、精力的に取り組んできたわけであるが、十分ではない。

また、多忙な本業を抱える消防団員の実情に配慮し、次の項目を推進する。

- (1) 年間の教養項目や目標を設定しやすいようスキルアップシートを作成する。
また、テーマを絞ってeラーニングで単位化した修得項目を設定し、各人が自由時間に予習後、実技指導を指導者と調整した時間に受ける。
- (2) 各分団単位で実技訓練日を年間計画で示し、団員が選択した時間に実技指導を行い、成果確認を受ける。その様子は、訓練動画で共有する。
- (3) 他団や他分団との合同訓練の実施、団全体と各分団訓練のスケジュールを可視化した上で所属分団以外の訓練参加を可能とする。

2 経験豊富な団員（中核となる団員）による訓練指導体制等の検討

- (1) 新入団員に対して監督系列を指定し、目標設定の指導と成果確認を実施する。
- (2) 研修による技術認定制度を作り、合わせて団指導者用マニュアルを整備、認定者には、認定書とワッペンを貸与する。
- (3) 団指導者による各分団間の垣根を超えた横断的指導を実施する。
- (4) 経験豊富な多摩地区消防団との交流（会議や訓練参加など）を図り、指導員の技術向上を図る。

3 操法訓練と実動訓練の実施の目安などの検討

アンケート結果から、操法大会へ向けた長期間の訓練や支援が負担との意見があった一方、同じ目標に向けて一致団結や基本操法を通じた組織活動の能力向上が図られてい

るとの意見もあったことから、他団の動向も把握しつつ、大会の隔年実施や実動訓練へのシフト等、さらに団員の負担軽減を考慮してあらためてアンケートや会議で意見を集約する。

なお、手法として、自己団内での大会ではなく、方面大会に各団が少数分団参加するなども検討する。

4 訓練効果の確認方法について検討

現在、訓練の重点である積載車等による出場から緊急走行、水利部署、現場活動までの活動について、団長による効果確認を実施する。

【検討の方向性 2-2】地域に尽力している消防団を地域住民により知ってもらう方策

1 積極的な災害活動の定着化と区等と連携した普及方法の検討

- (1) 平時から積載車で積極的に出場し、現場活動を定着化させる。
- (2) 活動や表彰を区報等で地域に周知し、認知度を向上させる。
- (3) 若い世代をターゲットにインフルエンサーを活用した SNS による広報を展開する。

2 地域からより理解と信頼を得る消防団づくりの検討

- (1) 日頃の訓練等の成果を披露できる操法大会や団点検、始式などに多くの区民を招けるよう、内容や会場等を改めて見直す。
- (2) 消防演習への参加や分団が主体となってイベント（防災訓練や消防団一日体験入団等）を企画する。
- (3) 団員自ら、リクルーターとして出身校や勤務先等へ、入団のメリットである報酬・資格取得・地域貢献・防災知識・他業種の団員から得られる知見等の魅力をアピールした広報を行う。
- (4) 地域防災リーダーとして知識や指導力等を向上させ、積極的に指導を各種行事等で展開する。
- (5) 団業務以外の地域イベント（ゴミ拾い等）に参加するほか、おやじの会、子供会防災訓練、学園祭、成人式等で広報する。
- (6) 学校防災推進委員への分団長の委嘱や、教育委員会を通じ総合防災教育のカリキュラムで消防団を紹介してもらうなど認知度を向上させる。
なお、やさしい言語や親しみやすい内容で動画やチラシを作成し展開する。
- (7) 高校や大学のボランティアサークル、防災センター、事業所自衛消防隊、スポーツジムなど向上心があり、消防防災と親和性の高い団体への入団促進を図るほか、同団体の SNS 等を活用した広報展開を依頼する。
- (8) 団員への信頼を向上させるため、コンプライアンスに関する服務教養を実施する。

【委員意見①】

委員意見： 能登半島地震のときにあった要望である、軽量電動チェーンソーの説明をあ

らためてしていただきたい。また、一般の方が消防団に対し持つイメージ、入団を妨げる原因等の分析をしていただきたい。

事務局： 軽量電動チェーンソーは、災害時に現場に向かうための道路啓開に必要な倒木、倒壊家屋等を排除していくための切断に使用する資器材を消防団に配備していくことの提案である。

また、ご意見のあった一般の方の消防団に入団することへの認識は、メディアや各種データ等を確認したい。

【委員意見②】

委員意見： 女性消防団員の入団促進のための広報や啓発、女性ならではのアピールの検討はされているか。

発災時、消防団員ががれきの中から救助する場面を想定した訓練を行う予定はあるか。また、消防団活動以外での結束のためのレクリエーションを推奨するとあるが、具体的にどんなことを行うのか。

事務局： 女性団員の募集等に当たっては、女性向けの内容についてどんな内容を充実させていくことが必要か検討したい。

がれきからの救助ができるようになった方がいいと考えており、消防署員からの震災時救助教養等の中でお伝えしていきたい。一方で消防団、消防署が行わなくてはならないこととして消火活動がある。こういったことを優先順位をつけて訓練を実施したい。

また、レクリエーションは、性別関係なく楽しめるスポーツ等を通じて結束を固めていきたい。

委員長： 今回の大きな趣旨は若い団員や在勤者の活動しやすい環境づくりがあるが、女性団員にとって居心地のいい環境とはどのようなものか。

委員意見： (自分の経験として) 入団したばかりのときに、規律等を丁寧に教えていただき、安心して活動に取り組むことができた。楽しいと思える場所であることが一番であると思う。

委員意見： 現在の副分団長が女性であることが大きい。女性の大変さを分かってくださっているため、すごく助かっている。体力面では男性が表に立つとしても、消火活動時の安全管理や住民の誘導など、女性の目線が大事であり、女性にしかできないことも多くあることをアピールしていくと入団者の増加につながると思う。

委員長： 消防団は団員から昇格するので、一定のキャリアも必要である。現在、第2分団長が女性であるが、女性副分団長はどこ分団か。

事務局： 団本部、第3分団、第6分団、第7分団、第10分団、第11分団である。

【委員意見③】

委員意見： 今年、中学生を対象にした普通救命講習の指導員として参加した消防団員から、若い子を育てていることを実感する機会を増やしていくことで、その子たちが高校生や大学生になり消防団に入ってくればよく、消防団に入らなくてもバイスタンダーとしての役割を果たせることを期待できることは重要である。救命の大切さを学ぶプログラムの検討はどうか。

また、消防団の指導について団本部主催の教育プログラムを作ることで、消防団同士の横断的なつながりも増えていくと思う。更に、指導員の資格取得後の活動にあたり、ビブス等の購入等の予算化、補正予算が組めるようであれば対応していただけると消防団のやりがいやモチベーション向上につながると思う。

事務局： 中学生、高校生に対する救命講習等は、現在、消防団員を派遣して実施している。ビブスの補正予算については、区と連携し検討を行っていく。

【委員意見④】

委員意見： 消防団を地域住民により知ってもらうため、今年目黒清掃工場で実施した消防団操法大会を、もっと見せられる場所で実施することを考えてほしい。

事務局： 日頃の成果を発揮する操法大会について、多くの住民を招けるような内容の見直しの検討を行い、より開かれた会となるような答申としたい。

委員長： 安全安心を第一にやっていくことが絶対条件であり、その上でより良い場所について検討を行ってほしい。

【委員意見⑤】

委員意見： 消防団の出動回数が、団長は年平均63回、団員が27回とある。このうち、実災害はどれくらいあるのか。

事務局： 当該回数は、目黒区内全体での訓練を含む回数をカウントしている。実際の災害出動の件数は、月ごとに異なるが、1月であれば約50名前後が出動している。2月は10名、3月が15名、4月が20名、5月が40名程度であり、概ね10名から20名の間で推移している。

委員長： 消防団のOBとして、火災等に出動する回数は、当時と比較して大きな変化がないと感じる。ただし、現在は、祭りの警戒や水防訓練に参加いただくなど、大きな役割を果たしており、それだけでも出動回数が増えており、今後、消防団の力はなくてはならないものと感じている。

委員意見： 地域住民は、消防団員がどのような場にいるのかがわかりづらいのではないかと。

委員長： 消防団に関する広報のなかで、一番大きいのはめぐろ区報である。その他、SNSによる配信等を行っていきたいが、消防団自身が仲間を誘うのが一番効

果が高いと思う。

【委員意見⑥】

委員意見： 少子高齢化、人口減少のなか、持続可能なものにしていくことが大事である。やりがいを増やして持続可能なものにしていくことは大事ではあるが、やりがいだけでなく、報酬や費用負担等のメリット拡充策が必要ではないか。

また、上意下達となりがちな消防団の活動に、消防団活動以外のレクリエーションを取り入れることでそれぞれの視点が得られると思う。そのような自主的な活動に対する支援を強化していただきたい。

事務局： 現状、災害や警戒に出動した場合の報酬として、1回あたり4,000円が支払われており、活動に従事した場合は、8,000円の報酬を支払っていることを訴求していきたいと考えている。

また、レクリエーションについては、ボトムアップの視点で企画していくことも大事であるので、素案に盛り込んでいけるよう検討したい。

【委員意見⑦】

委員意見： 昨年行われたバックボードを使用した災害時の救助訓練は反響があり、新たな視点を取り入れたことによりモチベーション向上につながっているようなので、持続していただければと思う。

また、操法大会における受賞の方式が変更となり、優勝分団に偏ってしまいがちだった個人賞が、優勝していない分団の中から順位を付けたことで個人賞の受賞につながり、団員としては非常に嬉しかったことをお伝えしたい。

事務局： 災害時の救助訓練は、消防団本部と相談しながら実施に向けた検討をしていきたい。

また、操法大会の新たな個人賞の設定は、非常に良かったという認識でいる。これは消防団本部からの発案でもあり、今後も個人のモチベーション向上につながる方式を取り入れられるよう検討していきたい。

イ 今後の審議予定について（案）

事務局： 本日は第2回委員会として、素案の審議を行った。多数の意見を踏まえ反映した答申案を作成し、次回令和7年1月23日に答申案の最終審議を願いたい。その上で答申期日である同年3月31日に答申する。

（質疑なし）

(6) その他

目黒消防署長、目黒消防団長からあいさつ

8 閉会